

キャリア教育で学校を変える。教師が変わる。

# 教育にかかるとは希望という形で必ず戻ってくる



## 一般社団法人 アスバシ教育基金代表理事 毛受芳高

めんじょう・よしただ ●1972年生まれ。名古屋大学工学部卒業。名古屋大学大学院人間情報学研究所修了。99年にアスケットを立ち上げ01年にNPO法人化代表理事に就任。学校と地域をつなぐ教育コーディネーター事業で実績を作る。09年に代表を退いてからはキャリア教育に関する政策提言や全国各地の教育NPO支援を行う。12年に一般社団法人アスバシ教育基金を設立代表理事に就任。

文／堀水潤 撮影／渡邊力(P60除く)

キャリア教育にかかわる民間人には情熱的かつ個性的な人物が多い。教育系NPOの先駆的存在であるアスケットを1999年に設立して以来、愛知県を中心に教育コーディネーター事業に携わってきた毛受(めんじょう)芳高もその一人だ。多くの教育関連事業にかかわり、キャリア教育に関するさまざまな政策提言や各地のNPOの支援を行ってきた。その毛受が近年、新たな動きを見せている。民間から寄付を募り、キャリア教育の拡充にあてるためのプラットフォーム「一般社団

法人アスバシ教育基金」の設立だ。なぜそうした組織を立ち上げるに至ったのか。氏の経歴を紹介しながらその必然性に迫る。

● 毛受は学生時代のエピソードに事欠かない。E.S.Sでのディベート、国際交流体験、英会話教育事業の立ち上げ、情報工学から認知科学への専攻の変更、名古屋市長選における公開討論会の主催など、そのすべてが今のキャリアのベースになっている。ディベートではクリティカルシンキングを学び、討論会主催では民意に社会を動かす力があることを知った。

なかでも内閣府主催の国際交流事業「世界青年の船」に2度にわたり乗船した体験は、若い毛受到多大な影響を与えた。

「洋上、インドの青年に言われた言葉が胸に突き刺さりました。『高度成長を成しえた秘密を探りに来日したが、がっかりした。日本の若者は夢や目標をもっていない』と言われたのです。『日本人は謙虚で本音を出さないから君には本質が見えていない』と反論しましたが、自分を含め、何となく進学し就職する若者が



多いことは実感していました。大学入学後に  
出会った外国人が「様に自分の意見を持ち、目  
標意識があるのでは対照的です。日本人は未  
熟でアイデンティティがないと言われていま  
うで悔しかったし、危機感を抱きました」  
そして、今なお変わらぬ日本の教育課題を  
次のようにとらえるようになった。

「日本の教育現場には、人との出会いがなく、  
体験や挑戦をする機会も少ないため主体的  
な進路選択が困難。実際、高校時代の自分も  
学部は消去法で選んだ。幸い、大学進学後、さ  
まざまな出会いに刺激を受けて主体的に行  
動できるようになったからいいもの、そうし  
た恵まれた機会がなく、キャリア意識が未成  
熟なまま社会に放りだされ、目標も自信も  
ない若者が増産されている現状は、日本社会  
において大変な損失である」

毛受は、当時顔を出していた起業家育成の  
ためのビジネススクールで、自前の教育改革論  
を発表した。学校や塾に外部講師を派遣し、  
出会いを誘発するというキャリア教育プログラ  
ムであった。ビジネスモデルとしては稚拙であ  
ったが、一定の評価を受けた毛受は、自分の進む  
べき道は教育にあると確信する。このとき修士  
の2年生。IT企業から内定をもらっていたが、  
「目の前に課題があることがわかっているのに、  
このまま就職したら敵前逃亡になる」という思  
い込みからこれを辞退。休学を延長し、教育改  
革の現状を知ろうと、県内各地を奔走した。

## アスクネットの設立

そのとき出会ったのが、愛知県内の私学の  
教員や保護者、生徒、市民らが運営する「愛  
知サマーセミナー」というイベントだ。「誰でも  
先生、誰でも生徒、どこでも学校」をコンセプトに、  
夏休みの数日間、著名人や市民、教員や  
学生らが自由に講座を開く「夢の学校」であ  
る。このときすでに600を超す講座に3万  
人以上が集う大型イベントに発展していた。

「学びを市民に開放し、出会いの場を作つてい  
る点で、理想の教育の場だと感じました」

と考えた毛受は、主催団体のつを訪れ、勢  
いにまかせて次のようなことを訴えた。

「私はまだ学生だが、教育を変えたいと思つて  
いる。その方法として学校と社会をつなぐこと  
を考えている。私の専門であるITを生かし  
市民講師をネットワーク化すれば学校にさま  
ざまなプログラムを提供できるはず」

熱意を買われた毛受は仕事を与えられ、愛  
知サマーセミナーにITを導入する「愛知私学  
教育ネット」(ASKNET)を立ち上げること  
になった。そして、市民講師のデータベースやオ  
ンラインによる講座登録などのシステムを構  
築。飛躍的に利便性を高めた。授業改革の運  
動として始まったサマーセミナーにITを導入  
し、キャリア教育的な視点を高めた取り組みは

「読売教育賞最優秀賞」などを受賞した。

2年後の01年には愛知市民教育ネットと  
してNPO法人化(06年にアスクネットに改  
称)。学校の依頼に応じて市民講師をマッチン  
グし、講座の内容をコーディネートする「市民  
講師ナビ」事業を開始した。各地の学校で開  
いた講座数は01年の36を皮切りに、小・中学  
校で「総合的な学習の時間」の本格実施が始  
まった02年には158に、その後03年331、  
04年618、05年645講座と増えていった。

「総合学習を効果的なものにするためには、  
学校と地域の連携は欠かせませんが、それ  
にはスキルやノウハウが必要です。自治体のなか  
には、市民講師のデータベースを作成するこ  
ろもありましたが、リストだけでは中身まで  
わかりません。そのため目利きができ、しか  
も、多忙な先生と、学校文化に慣れていない  
市民講師や企業の間立ち、両者を結びつけ  
るコーディネーターの存在が不可欠でした」

そして、事業を継続するなか、コーディネ  
ターはボランティアではなくプロフェッショナル  
でなければならぬことを確信する。

「市民講師ナビ事業では当初、ボランティア  
が支援するモデルを考えていました。しかし、  
コーディネーターの仕事は多岐にわたり、日  
中に動く必要があります。責任を伴うプロ  
でないとならぬことがわかってきました」  
とはいえ、コーディネーターとして自立して  
食っていくことは困難が伴う。学校に予算は  
少なく、講師料はともかく、コーディネーター  
の費用まで負担できないというケースは多い。

「超過勤務が続き、講師の依頼が増えても  
収入が増えることはありません。完全にNPO

としての心意気ややっている赤字事業でした」

調べてみると、同様のことを考え、実践して  
いるNPOが全国にあること、そして「様に運  
営資金面での課題を抱えていることを知っ  
た。毛受はそうした団体と連携しながら、行  
政、そのほかに対してコーディネーターの必要  
性を訴えるようになった。04年の愛知サマー  
セミナーでは「教育コーディネーターフォー  
ラム」を主催。全国から志を同じくする個人、  
団体が集結し、教育コーディネーター制度の  
発足に向けて活発な意見交換を行った。

## コーディネーターの育成

地域のNPOであったアスクネットが全国に  
知られ始めたのは、経済産業省の「地域自律・  
民間活用型キャリア教育プロジェクト」(05~  
07年)の事業委託を受けたころといえる。

当時のアスクネットは「市民講師ナビ」や、  
愛知サマーセミナーなどの「教育イベント推進  
事業」に加え、高校生向けキャリア教育情報  
誌の発行(03年)ほか、教育や市民活動に関  
するさまざまな事業を自治体や企業から受  
託するようになっていた。そんななか、経産省  
本省から問い合わせの電話がかかってきた。

「それが鈴木英敬氏。今の三重県知事です。  
キャリア教育事業を立ち上げる際のモデルに  
したいからアスクネットの事例について話を聞  
かせてほしいということでした。中央の官僚  
は初めてのことで、対応に戸惑いました」

同時に、事業開始以来、コーディネーターの  
必要性を訴えてきた毛受にとって、ようやく



2013年2月に東京で行われた第3回「アスバシLIVE」にて。教育課題の解決に向けたプランの発表や活発な議論、交流会が行われた。

国が認めてくれたといううれしさがあつた。

同事業の目的は、「学校と産業界・地域が一体となったキャリア教育の仕組みを構築すること」にあるが、最大の特徴は「経産省が直接学校や産業界を支援するのではなく、NPOなど地域の民間主体をコーディネーターとして支援する」点にあつた。そのためモデル地区として全国28カ所が選ばれ、アスクネットは愛知県瀬戸市の商工会議所と共にプロジェクトを展開することになった。この「瀬戸キャリア教育プロジェクト」は、コーディネーターの活躍もあり、8中学校と5小学校で、市民講師による講座、体験学習、職場体験を実施し、高い評価を得た。その実績から同事業の最終年に当たる07年、アスクネットは地域のNPOながら、全国のモデル地区の取りまとめを行う中核コーディネーターとなった。毛受らは各地の事例を研究し、その成果は『キャリア教育ガイドブック』（学事出版）としてまとめられた。同事業によってコーディネーターの重要性

が認知されるようになる。次なる課題はコーディネーターの質の保証だ。つまり育成や評価にかかわる問題である。そこで経産省は、「キャリア教育民間コーディネーター育成・評価システム開発事業」を開始。アスクネットは中核コーディネーター（08年）として事業を受託し、毛受はテキストの作成や、育成研修・認定試験など、育成・評価システムのスキーム作りに深くかかわった。同事業の2年めからは、これまで共に教育コーディネーターの制度作りを進めてきた東京のNPOと連携。「一般社団法人キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会」という全国組織が設立され、そのもとで11年に始まった「キャリア教育コーディネーター認定試験」は、この13年6月に第3回を迎えるまでになった。

### キャリア教育プロデューサー

実は、キャリア教育コーディネーターの育

成・評価システムの開発にかかわっていた09年、毛受はアスクネットの代表から退いている。

「教育を変えるには制度から変えなければいけない」という信念のもと、地元と東京を往復していましたが、「地域のNPOなのに何を目指しているのか」という疑問の声もあがるようになっていました。組織を維持するためには資金繰りなど、さまざまな問題を抱えることにもなり、経営と信念との間にズレも生じてきます。アスクネットの果たすべき役割と自分のミッションとのズレも感じ、二度リセットする気持ちになったのです」

身辺を身軽にした毛受は、「キャリア教育プロデューサー」を名乗り、各地のNPOを支援する活動を行うようになった。この間、大学生を対象とした長期実践型インターンシッププログラムのカリキュラム開発にもかかわった。外に身を置き、いろいろな組織にかかわったことで、自分を客観的に見ることもできたという。「気持ち先行しがちな私は言葉足らずで、意思決定のプロセスが見えづらく、結果、自分では周りに配慮したつもりでも、物事を雑に進めることが多く、それらは反省点です」

代表を退いたとはいえアスクネットとのかわりは今も続いている。

設立当初は主に、学校の依頼に応じる形で教育コーディネーター事業を行っていた同NPOは、前述のとおり、行政や企業から事業を受託するようになり、現在は愛知県全域を対象としたキャリア教育の推進に取り組んでいる。

そのついで、愛知県から受託した「人材育成コーディネーター推進事業」においては、県内の高校生を対象にした広域公募型インターンシッ

プを実施。毛受はその事業にも携わり、インターンシップの効果を改めて体感した。

このように小学校から大学まで、多様な校種・校風の学校において多彩なキャリア教育プログラムを実践してきたことが毛受の強みだ。「発達段階や心理状況によって、同じ講座やインターンシップでも、受け手のとらえ方はさまざまです。いろいろな現場をみてきたことで、こういうケースでは効果があり、こういう場面では効果がないという経験が蓄積されました」

### アスバシ教育基金の設立

今、毛受はキャリア教育にかかる資金を民間から調達するという、新たな動きに乗り込んでいる。広く寄付を募り、集めた基金でも多くの高校生らに、コーディネーターがマツチングした実践のかつ感動的なインターンシッププログラムを提供しようという取り組みだ。

キャリア教育の必要性や政策的必然性を認めながら、なかなか予算がつかない国に頼ることなく、ファンドレイジング（非営利団体による寄付などの資金調達）を始めたわけだ。

12年にはそのプラットフォームとして「一般社団法人アスバシ教育基金」が設立された。アスバシとは「明日の社会にかける橋」の意。若者が変化の激しい社会にスムーズに移行できるよう橋をかけよう、という思いが込められている。縁あつて、外資系の大手コンサルティング会社CSR（企業の社会的責任事業としてサポートを決めたことで規模は一気に膨らんだ。また、理事にはキャリア教育を推進してきた各地のNPOや企業の有力者が名を連ねた。

「これまでの多くの出会いのなかで、ぜひ連携したいと思っていた方が賛同してくれました。長年それぞれの分野で実績を積んできた友人や同志が『この課題はみんなできちんと対処しよう』と集まってくれたと感じています」

寄付の方法はさまざまだが、ユニークなのは Challenge For Challenge と名づけられた企画だ。大学生らが教育課題とともに、解決に向けたオリジナルプランを提示。その挑戦に賛同した人が、提案者を応援する形で寄付をするというもの。そのためのプレゼンや議論の場を「アスシエーヴ」と名づけて各地で開催し、毎回多くの参加者を集めている。

先行して活動を開始した地元のアシエーヴは12年度に総額にして約500万円の寄付が集まり、その夏、第二弾として71人の高校生がアスシエーヴのインターンシップに参加した。

「若者の熱意あるプレゼンテーションを聞くのが気持ちが高まります。それを応援しよう」と集まったお金で、今度は高校生にインターンシップという形で感動を与えることができる。寄付するほうも楽しい気分になれるわけです」

この取り組みは、個人や企業に向けた、お金の使い道の提案だとも毛受は言う。

「何に使われるかわからない税金にとられるより、直接教育に使うことができればどんなに合理的でしょう。なかには『遺産相続で身内が争うくらいなら若者のために寄付したい』と考える人もいます。事実、海外の子どもたちを救うために相当な寄付が集まっていますよね。いっぽう足の若者のこととなると無関心。けれどそれは使い道を提示していないだけ。選択肢の問題です」

「なんだか雲をつかむような話でもあるが、そこには毛受なりのヴィジョンがある。」

「なぜ、そこまでの手間をかけて、無理やりお金集めをするのか？」とよく聞かれます。確かに非効率だし、寄付金だけで全国の高校生にインターンシップを体験させられるとは思っていません。しかし、少なくとも『教育にお金をだして機会を提供できれば、こんなに子どもたちは変わる』という事例を作ることができます。最初は簡単には理解されないことでも、言い続け行動していくことで次第に関心をもつ人も生まれるでしょう。それが人の意識を変え、ひいては行政を動かすことにつながると思います。『自分たちでお金を集め、こんな効果をだしています。国や自治体も仕組み作りから一緒にやりましょう』と言えば説得力も伴います」

それは、アスケットの市民講師ナビ事業がキャリア教育コーディネーターの育成事業という政策につながったのと同じ構図だ。簡単ではないが、材料がなければ議論にもならない。さらに毛受には、このシナリオがうまく機能した先に描く夢がある。

「介護保険あるいは各地の森林環境税のような仕組みを作りたいのです」

地域の教育目的に限定して、市民に少しづつ負担を求め、子どもたちの未来のために使う仕組みを自治体レベルで実現する。それは、景気に左右されず使うことが可能なお金だ。集めたお金の一部で、能力や情熱のあるコーディネーターが金銭面で正當に評価され、職業的に自立できるようにしたいとも考えている。

「介護だつて最初はボランティアのようなものでした。それが、介護保険ができたことで介護の作業に単価がつけました。まだ単価が安いという問題があるにしても少なくとも仕組みはできたのです。ならば教育を支えるコーディネーターの仕事にも単価をつけることができるはず。それがコーディネーターの質の向上につながり、学校現場に還元されると信じています」

先生方はまじめで一生懸命。地域には教育に期待するたくさんの方がいると毛受。

「そこに両者を結びコーディネーターがいて、三者がジャズのセッションのように、互いに良い演奏を引きだしあう状態になればいい。それで若者が何かのきっかけをつかんで成長できれば、みんながハッピーではないですか」

●

若き日の毛受到多大な影響を与えた「世界青年の船」は、民主党政権下の事業仕分けで廃止と判定。結果、今年度は事業名の変更に規模の大幅な縮小が行われた。現在平成26年度予算に向け、事業継続の検討が行われている。

「これに限らず財政難で消滅した交流・体験プログラムは山ほどあります。私たちは、知らないうちに子どもたちから多様な体験や挑戦の機会が奪われていることに気づいていません。こうした状態が進むと、意欲の低い子がモチベーションを高める瞬間をどのように作ればいいのか。」

お金に恵まれた子だけがそうした体験ができる世の中になつていいはずがありません。最近の若者はだめだと無責任に言う人がいますが、成長する機会を奪えばだめになるに決まっています。確かに、教育にはお金がかかります。けれど、使ったら消えるものかといえばそんなことは決してありません。それは、子どもたちの成長となり、私たちの明日の社会に向けての希望という形で必ず戻ってくることを信じています。」

NPOの設立以来、経営や予算の壁と格闘してきた毛受は、何をしても行きつく先はお金の問題であることを痛感している。だからこそ思う。どれだけ成長したかという議論にならず、コストの話で片づけられてはたまらない。金があるから教育する、金がないから教育できないではだめだ。(敬称略)



愛知県立阿久井高校の進路講話にて。右から進路指導主事の澤田憲孝先生、コーディネーターの太田正利氏、外部講師の森哲也氏。三者のセッションが続く仕組み作りが毛受の仕事。